

★「武蔵国府寺」創建伽藍の復元（訂正版 2 - 4）

川瀬健一

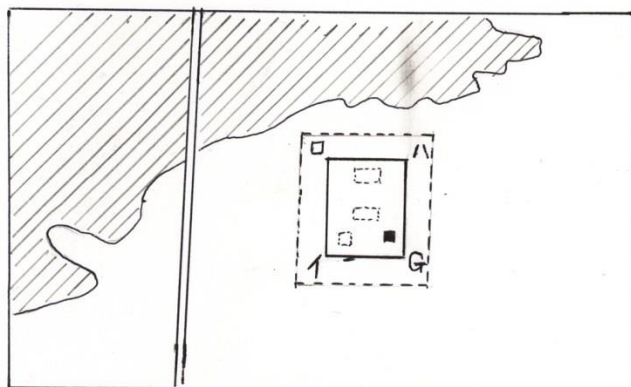
4) 「武蔵国分寺」の歴史の新たな仮説

では従来説の矛盾点を無理なく説明するには、どのような説明が可能なのか。

これを考えてみると、「武蔵国分寺」には五つの時期があったと考えることができるのである。

第一期。これは塔 1 を含む草創期の伽藍が計画され一部出来上がったものの途中で放棄された時期である。第二期。これは途中放棄されたが塔 1 だけは完成していたので、これを中心に新たな伽藍が計画され区画溝 ABCD が作られた時期である。第三期。二度目の計画も放棄され、従来の伽藍の西側に新たな伽藍地が作られ、ここに「金堂院」を中心とする新たな寺院が建立された時期である。第四期。これは出来上がった伽藍が火災で焼失したあと再建された時期。最後の第五期がこの寺院の衰退期であるが、ここではこれは論じないこととする。

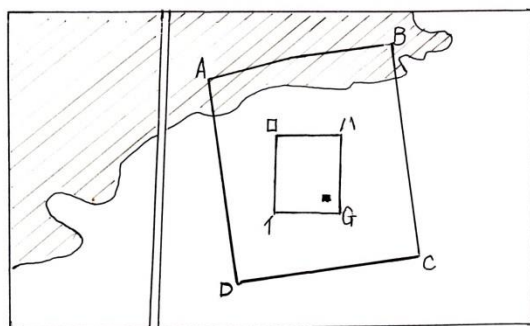
① 第一期（新区画①）



塔 1 を含む創建伽藍の建設時期である。従来説では南北軸が真北をほぼ向いている塔 1 に対して、南北軸が真北から西に約 7 度傾いた伽藍区画溝 ABCD を組み合わせた。しかし設計思想が異なるものが組み合わせられるはずはない。本来は塔 1 と同様に南北軸がほぼ真北を向いた伽藍区画が塔 1 建設前にまず設定され、それから塔など寺院の主要伽藍の建設が始まるはずである。この本来の創建伽藍の寺院区画溝は、先にもみたように区画溝 FGHI の一部であったとみられ、南北軸を真北に向けた正方形または長方形の区域を限る溝であったと思われる（その復元は後程）。その区画溝の南辺をイ G、北辺をロハとして表示する。なおこの区画溝ロハ G イ内部には塔や金堂・講堂などの主要伽藍があり、その外にほかの建物も含む外郭があって、その外郭を区切り寺院入り口としての南大門をもった寺院外郭

区画溝も当然最初に掘られたはずである。このため結局は建設されなかった塔2や金堂・講堂と寺院外郭区画溝を点線を表示しておく。なお創建伽藍はのちにみる火災後の再建で塔2が建設されたことを元に、双塔式伽藍であると推定され、当時のものとしては、薬師寺式か大官大寺式が想定できる。なおこの創建期の外郭区画溝の外側の寺院の北側に、「国師」の居所としての「北方建物」も建設され完成した可能性はある。現在発掘によって見出された武蔵国分寺の薬師堂のすぐ下にある「北方建物」よりもさらに古い「北方建物」とみられる建物が国分寺の仁王門付近に見られ、ここには創建塔である塔1と同じ形式の古瓦がみられるからである。

②第二期（新区画②）

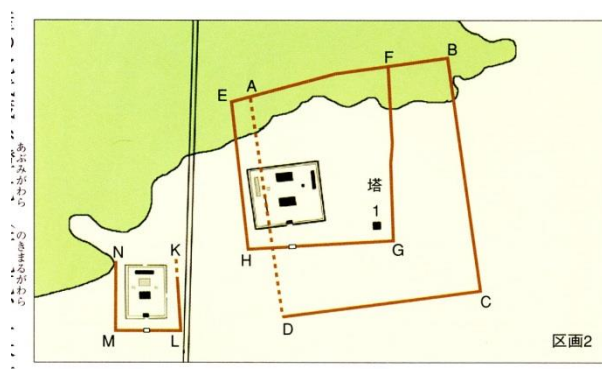


しかしなぜか創建伽藍は塔1を建設しただけで中止となった。

このあとで創建伽藍とは異なる建設主体が、塔1を利用した新たな寺院を建立しようとして、寺院区画溝 ABCD を掘ったが、その段階でこの計画も中止となったと思われる。計画が中止された理由は明らかではないが、この次の時期に創建伽藍を避けるかのように伽藍地を西に移して「金堂院」が建立されたことを考え合わせると、区画 ABCD で寺院を建立しようとするに創建伽藍を破壊せざるを得ないことが計画中止の背景にあったものと思われる。

またなぜ創建伽藍と寺院区画溝 ABCD の建設主体が異なると思ったかという点、創建伽藍は東山道武蔵路に平行に南北軸をほぼ真北に向けて作られているのに対して、寺院区画溝 ABCD はその南北軸が真北から西に約7度傾いているからである。前者は天文学的知識を生かして真北を測定して寺院を建設しているのに対して、後者はこの知識が使えなかったため磁石を使ったため、その当時の磁北が真北から西に傾いていたため、創建伽藍とは異なる向きの寺院区画溝が掘られたのだと思われる。

② 三期（新区画③）

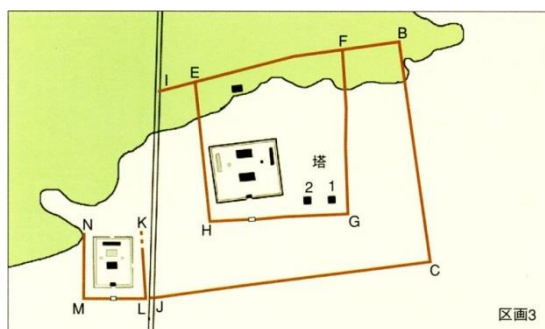


創建伽藍建設が中止されたあとの新たな構想も中止されたあと、当初の伽藍域の西側の地域に伽藍建設地を移して、あらたな寺院が構想され建設された時期である。

まず創建伽藍の区画溝 G ハを北に延長して寺院区画溝 AB の接点まで延長。さらに創建伽藍の区画溝 G イを西に延長し、新たな寺院を創建伽藍の西の空白域に建設できるように寺院区画溝を掘る。この際に区画溝 BA を西に延長して区画溝 BC に平行に西側の区画溝を掘り寺院外郭区画溝とし、区画溝 ABCD は AD を埋めた上で寺院区域溝として再利用。こうした新たに寺院区画域を設定したあとで、創建伽藍の西側に「金堂院」を設定し、これを囲む寺院内郭区画溝を掘って、その中に金堂・講堂などを設け、区画溝の内側に掘立柱の瓦ぶき塀を立て、内郭の入り口として礎石立ちの中門を建設。そのうえで伽藍外郭区画溝となった GH 線と「金堂院」への参道との交点に橋を設けて南門を建設した。そして塔は創建塔である塔 1 を再利用し、「金堂院」の北方に「国師」の居所と目される新たな「北方建物」も建立された。

この新たな寺院「金堂院」は南北軸が真北から西に 7 度傾いており、このことからこの寺院の建設者は二期の建設者と同じく磁石を使って寺域を定めたことがわかる。

③ 四期 (新区画④)



こうして創建伽藍の西側に建立された「金堂院」は 9 世紀の前半に火災によって一部は焼失してしまった。塔 1 は発掘によって焼失したあと元の基壇と礎石を再利用して補修しその上に新たに塔を建設したことが確認でき、金堂の一部にも焼けた跡があることが確認でき、この寺院再建期に、「金堂院」を取り巻く塀が掘立柱塀から築地塀へと作り変えられ、

礎石立ちの中門が掘立柱の中門に建て替えられたことも確認できる。なお講堂はこの再建期に基壇が大きく拡大されて金堂と同規模になったことから、もしかしたら講堂も火災で焼失したので建て替えられたのかもしれない。その痕跡は発掘されてはいないが。

なおこの火災後の再建期に、再建された塔1の西側54mのところに、塔1とほぼ同じ規模で同じく南北軸がほぼ真北の塔2が建立された。この塔の基壇版築土内から9世紀前半に比定される土器が出土しており、さらに塔2の版築方法は塔1が積土と砂礫が交互に積み重ねられているのとは異なり、赤土や黒土など数種類の土が整然と交互に積み重ねられており、明らかに塔1とは建設年代を異にしている。そしてここからは塔1では見られない種類の新たな文字瓦も出土しているので、ここに新たに塔が建設されたのではないかと見られている。

なお従来説ではここ新たに塔が建設された理由を説明できていないが、これは創建伽藍がもともとは双塔式伽藍であったのを、再建に際して復元しようとして塔2を建設したが、創建伽藍を復元するには、焼けなかった金堂を移設したり、新たに講堂を建設したりなど膨大な費用と時間がかかることから計画が中止され、塔2の建設だけにとどまったのではないかとの仮説を提示しておきたい。

(2016年10月20日)